
 報告

第3次中華民国史国際学術討論会参加記

(於南京大学, 1994年12月18日-20日)

(東京大学大学院) 川島 真

世界の民国史研究者が集う中華民国国際学術討論会が、去る12月に寒さの厳しい南京で開催された。南京で開催される本検討会も今次で三度目になる。前回の87年は国家档案局の主催であったが、今次は南京大学中華民国史研究中心の主催で行われた。100名以上の大陸研究者、50名近い外国人研究者が参加し、大変多くの新視角・論点が提示され、また豪華なパーティが開催される等、全体的に見て盛会であったと思う。組織委員会の張永桃首席、実質的な案排を担当した張憲文副主席、黄美真秘書長、陳謙平・顧寧・陳紅民副秘書長らの辛苦が窺える。この場をかりて感謝の意を表したい。

日本からは石井明、奥村哲、川島真、久保亨、佐々波智子、高田幸男、瀧下彩子、田中比呂志、土田哲夫、中村哲夫、野沢豊、萩原充、横山宏章（敬称略、五十音順）が参加した。外国人中、日本人が最多だったが、台湾の陳三井・張玉法、またフランスのピアニコ、アメリカのエシェリック、ドイツのフェルバー等の姿も見えた。

会議は全体会と分会に分かれ、1日半大会報告がなされた以外は、各分会において100近い報告がなされた。分会は第一組（政治組）、第二組（経済、社会組）、第三組（人物組）、第四組（中外関係組）、第五組（文教、思想、軍事組）で構成されていた。各分会では、民初から時期を追って、半日5、6本の報告が行われた。本来なら、これらの各分会の状況を報告するべきなのだが、筆者は全大会と第四組（中外関係組）にしか参加しておらず、また語学力の拙さからあらゆる討論を聞き取れているわけではないので、本稿では筆者が総会や分会に於いて個人として受けた印

象を述べてみたい。

台湾インパクト 今次の討論会には前述の様に中研院近史所現所長の陳三井と前所長の張玉法を始め、傅宝真（彰化師範学院）や潘懷玉（中研院近史所）が報告者や司会者として参加した。彼らの様な台湾の著名な研究者が参加し、また討論会のスポンサーが台湾人老闆であったこともあって、台湾色が随所に目立つ検討会となった。無論これは、様々な意味合いから兩岸協力を提唱する大陸側の意図によるものであったが、決して表面的な演出に止まったわけではなく、陳三井氏が台湾での学会開催を約束する等、具体的な提示も見られ、今後の兩岸における学術交流の進展が、目に見えるかたちで印象付けられることとなった。「兩岸交流」という前二回の検討会にない要素が、今回の一つの目玉であったが、これは政治的意味合いに止まらず、学術面を含む各方面に台湾インパクトともいえる様な影響を与えることとなった。

台湾側からの学術的批判 兩岸双方で発言への制約が弱まったこともあって、結果的に筆者の参加した分会（第四組＝中外関係組）では学術的な台湾インパクトが随所に見られた。例えば以下の二点が挙げられる。①台湾の研究者が大陸のある報告者に対し、報告とほぼ同内容の台湾側の文献を参照せず、結論に於いてはその文献で提起された内容に及ばなかった点で、かなり痛烈な学術的批判を行い、更にその文献で使用されていた台湾の史料の紹介を行ったこと。②日本の研究者の報告に関して、ある大陸の研究者が些か教条主義的な批判演説をしたのに対し、台湾の研究者が論点を把握した発展性のある見解を提示したこと。学術検討会の持つ意味が兩岸で異なり、これまで大陸

の常識を「それはそれ」として受け入れてきた日本人研究者も多いのだろうが、兩岸の研究者が集う場では「それはそれ」に止まることは許されていない様である。

台湾側史料への注目 また、本分会では昨年のアメリカでの学会の影響からか、史料面での台湾インパクトが随所で見られた。大陸では第二档案馆等で史料の公刊が盛んだが、一方で台湾の史料への関心が非常に高まっており、その史料に高い学術的価値と「新しさ」が付与されている様であった。ある大陸側の若い研究者は、第二档案馆の史料を使わず主に台湾側の公刊史料集に依拠した報告を行ったし、筆者の報告も台湾側の史料を使用しているという点で注目された。大陸の档案馆使用費が高い為に頻りに利用できず、一方で台湾が注目されているので、台湾の公刊史料が使われるのだろう。こうした点を考慮してか、陳三井からパリ講和会議とワシントン会議の部分の檔案の公刊を進めるという発言も出たり、大陸側からは台北の大溪檔案の公開を求める発言があった程である。

進行上の工夫 これまで述べてきた様に議論が活発になった背景には、会議を安排した南京大学側の進行上の工夫があった。特に各報告にコメンテーター（評論人）が配されたことは注目に値する。確かに「評論人」が「演説人」に化けることもあったが、筆者の報告の評論人任東来氏の様に、論点をかみ合わせて発展的に議論をしていこうとする傾向も見られた。だが論点がかみ合った議論は、北京政府期の様な「既に突き放された」時代の報告の際に多かった様にも思う。

日本人の研究の評価 本検討会では、革命史観等の従来の枠組みの中で論をたてる報告もあったが、こうした枠組みを離れた実証的社会経済史・地域研究関連の報告も多かった。筆者の参加した分会では、大きな枠組みは継承されているものの、30年代の外交についてドイツ関連の報告が集中する

等、アメリカや日本の学会動向を取り入れた実証的内容が報告された。また、報告や質疑応答で注目されていたのが、「ソ連」要因ではなく、むしろ「アメリカ」であったことも興味深い。大陸の研究動向は、改革開放を背景に若手を中心として急速に変化してきている様である。しかし欧米の参加者の中には大陸側の一部の研究に対して些か不満があった様である。閉会式でエシェリック氏は、あてつけからか、日本人が実証的な、新しい研究視角を（中国語で）提示したことを絶賛した。大学院生として参加して 私事で恐縮ながら筆者は報告者の中では恐らく最年少に属していた。この場をかりて、この様な分不相応な貴重な機会を与えて下さった先生方に感謝の気持ちを表したい。報告に対する批評や質疑を通して様々な角度から自己を再点検することができた。また大陸とアメリカの外交史を専攻する院生と交流できたことも大きな収穫であった。大陸では、院生でも研究視角の大枠を崩していないが、とにかく新しい史料を使った新しいテーマを見つけたいという欲求の強さには驚かされた。時期的には国民政府組が多く、日中関係よりもアメリカや西欧との関係を重視しようとする傾向があった様に思う。それに対してアメリカの院生は、時期的には北京政府期で、政府内部の外交政策決定過程や国際秩序の中の中国を中国に即して扱おうとする傾向が見られた。だが、史料の面から言えば、経済的に恵まれているアメリカの院生が第二档案馆の史料を大量にコピーしているのに対し、大陸の院生はそういうわけにはいかない分、苦しい立場にある様であった。

詳細な討論内容 本稿では、僭越ながら一参加者としての率直な感想を述べてきた。なお、今次の討論会の各部会における討論内容は『近きにありて』誌上に掲載される予定がある様なので、併せて参照されたい。